美鈴と吸血鬼のお話。

あんぎゃーす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
美鈴と吸血鬼のお話。

【Ｎコード】
Ｎ８５６５Ｏ

【作者名】
あんぎゃーす

【あらすじ】
美鈴と吸血鬼のお話。
プロットなぞ無い（崩壊した）のでその場のノリとかで書いてます。
初めて読む方は前書きをお読み下さい。

前書き

紅美鈴。

幻想郷の一角にある紅魔館にて、門番という仕事をしている妖怪である。

幻想郷の醍醐味である弾幕決闘が弱い上、よく勤務中に寝ている事から、しばしば上司である十六夜咲夜にナイフを刺されたり、「中国」というあだ名で呼ばれたりする。

「普通の魔法使い」霧雨魔里沙等からも雑魚扱いされているという、何ともまあ不憫な妖怪である。

しかし…

幻想郷の一部の強者と、紅魔館の住人（妖精除く）以外は気づいていない。

咲夜の使うナイフは純粋な銀のナイフだ。

銀というものは古来より、魔を払うものとして使われている。

咲夜の主である吸血鬼等が良い例だ。

銀は魔の者全てに「効果は抜群だ！」どころか、やりようによっては致命傷だって与えることが出来る。

まあ、大妖怪には掠りもせずに殺されることも多いのであるが。

とにかく、銀は「妖怪」にとっては大弱点なのだ。

しかし…紅美鈴はどうだ？

咲夜が銀のナイフを刺した所で、ちょっと痛がるくらいだ。

どう考えてもただの妖怪ではない事が明らかだ。

…閑話休題。

ともかくこれは、とあるとても強い美鈴と、吸血鬼達のお話。

注意事項

・東方？ネギま？何それおいしいの？
・ご都合主義とか…無いわ
・最強とか…無いわ
・百合とか…無いわ
・更新遅いとか読む気しねー…
・クオリティ期待
・あなたの事が嫌いです

以上に当て嵌まる方は回れ右して自分のお気に入り小説を読んだ方がいいです。

・東方好きでネギま好きさ！
・最強物とかいいよね
・百合は至高
・ご都合主義万歳
・更新遅くても気にしない
・クオリティを求めたら負けだと思ってる

上に当て嵌まる方はごゆっくりとお読み下さい。

また、だいたいは自己満足と電波で書いているため、文句とかはあまり受け付けません。

誤字の指摘とかはぉｋですが。

それでも本当にいいですね？

ではどうぞ。

美鈴はどこかの世界で目を覚ました様です（前書き）

とりあえず前書きだけだとあれなので。

美鈴はどこかの世界で目を覚ました様です

「う…うう…ん…」

風が鼻の奥を擽った。

ああ、確か昨日は夜勤で、そのまま寝ちゃったんだっけ…

起きなきゃまたナイフ刺されちゃうかな…

痛いのはちょっと勘弁…

でも眠いな…

とりあえず目を開けよう…

いつもみたいに起きたら咲夜さんが目の前にいたりするのかな…

うう、ナイフが怖い…

でも、寝っ転がっている身体を起こすのはなんか不必要なほどエネルギーいるよねぇ…て、あれ？

（私…何で寝っ転がってるの？）

確か、私の記憶だと壁に寄り掛かってたんだけど…

とりあえず目を開ける。

草原。

そのど真ん中で私は寝っ転がっていた。

「…あれ？えーと…あれ？」

繰り返すが、私は門によっ掛かって寝ていた筈なのだ。

しかし今見ているのは、何処までも続くかのような草原。

よく見ると遠くには綺麗な山脈まである。

反対側には鬱蒼と生い茂る森。

「えーと…どういう状況か…」

周囲には人っ子一人いないし、そもそも人型の影も形も無い。

「まさか…外、か？」

だとしたら大変だ。

急いで戻らないといけないけど…

「でも…なんか変だなぁ…？」

「やっぱり、か。」

あれからとりあえず色々な所を探したけど、わかった事がある。

この世界、幻想郷が無いのだ。

まだ生まれていないのか、それとも存在していないかはわからないけど、無いものは無かった。

それに…

「何故稲作…」

山の上から見下ろす私の目には、田畑を耕す人の群れがいた。

つまりこの事態を総合すると。

・タイムスリップ（確定）
・平行世界（可能性大）

という事になる。

「これはひどい…」

いやもう本当に何が起こったのだろうか。

知っている人がいたら教えてほしいよ全く…

「…しょうがない、か。」

座標を覚えて来たから、ここが外界で言う「日本」の「東京」という所なのはわかっている。

「ええっと、とりあえず日本で稲作が始まってるんだから、大体今は西暦で言う２００年くらいだから…いるとしたら、この世界でお嬢様が生まれるまで１３００年位かぁ…」

まあ、１３００年位はどうってことないからいいけど…

その間ずっと寝てる訳にも行かないし…

「まあ適当にふらついて、面白そうな物があったら寄り道して、それで１３００年位あっという間かな。

うん、行こうっと。」

とまあ、気楽に私は歩きだした訳だ。

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

これが紅美鈴の新しい旅の始まりだった。

そして、それは吸血鬼との新しい人生の始まりでもあった。

本当に物語が動き出すのは１３００年という長い月日の先。

それまでは、美鈴の道中をお送りしよう。

では、今回はこれまで。

美鈴はどこかの世界で目を覚ました様です（後書き）

この小説はどこに行くのか…

約６００年が経ちました。（前書き）

という訳で二話目。

適当に書き散らしてます。

早くあの子達を出したいのよねー。

約６００年が経ちました。

という訳で、約６００年間色々な所を歩いた美鈴。

ある時は…

「森ですねぇ…何だか暗い…狼とか出たらどうしようかな？」

アォーーーン……

「うん、よし。

…焼いたらちゃんと食べられますかね？」

ハッハッハッハッハッ…

ザザザザザザ…

「乾かせば日保ちもしますし、結構良いですかね～？

塩があれば良いんだけど…」

グルルルル…ウォンウォンッ！

「せいっ」

ギャンッ！？

グチャッ

「うん、なるほど…
この種類の狼ならもう来ないですかねー。
一応保険かけときましょうか。」

ギロッ

ビクゥッ！

「これでいいかな？
まだれっきとしたボスはいないみたい…
ボスが出来たらまた会いに来ようかな？」

またある時は…

「ありゃりゃ…こんな漫画とかにしかいないような人…あ、そうか。
この時代ならいてもおかしくないかな？」

「よう姉ちゃん、身ぐるみ全部置いてきな？その体で俺達を楽しま
せてくれりゃあ、通してやっても良いけどな！」

ガッハハハハハハ！

「うーん、とりあえず…」

ガッゴスッドコォッ

パンパン

「まあ、そりゃそうですよねー。
弱いからこうやって群れて更に弱いものを襲うんですもんねー。」

「ぐっ…て、てめぇ…何もんだ…」

「しがない一人の旅人ですよー。
さて、次はどこに行こうかな…」

とまあ、この他にも色々な事があったが、全部書くときりが無いためここでは割愛。

さて、そんな美鈴が日本に戻ってきた時の話。

美鈴はこの地で、後世に代々伝わっていく対魔の一族を見つけるのであった。

「平安京か…」

美鈴の目の前には大きな門。

正確な年代など美鈴はまだわからないが、今は西暦８００年程。

まだ長岡京から遷都したばかりで少し慌ただしいが、それでもかなり落ち着いた雰囲気に見える。

「まあ、そんなことはどうでもいいんですがね。」

身も蓋も無い。
しかし、紅美鈴は分類では「妖怪」なのだ。

ぶっちゃけ興味の無い人間はどうでもよかったりする。

その点では、普通の妖怪とは変わらないのかもしれない。

「さてと、とりあえず夜まで時間を潰さなきゃなー。
…もう対魔の一族とかは発生してるのかな？
探してみようか。」

「やっぱり発生してたのかー…
名前は…神鳴流？聞いた事無い…やっぱりここは平行世界なのかな？」

今美鈴はかなり大きな屋敷の近くの木に登って、その屋敷の中を見ていた。

屋敷の中では、何人かが刀を打ち合っている。

「…へぇ、気で刀を強化してるのか…
この時代にしては凄い技術だなー。
並の妖怪となら苦もなく勝てるかな？」

美鈴は素直に称賛した。

この時代では魑魅魍魎の類はかなりの脅威であるため、それに対抗できる人間を既にこれだけ育てているなら、それは同業者に対してかなりのアドバンテージになるし、信用も置いてもらえるようになる。

しかし…

「剣術だけじゃあそのうち勝てなくなりますかね？決め手みたいなのがないですし。
あと一対多にも弱いかな。
少なくともそこを克服しない事には…ん？」

広い庭で練習する弟子達を見ていた筈の男性が、美鈴の方を向いていた。

美鈴は少し周りを見渡して、自分を指差す。

男は、しっかりと頷いた。

どうやら気づかれていたようだ。

（まあ、気づかれるように少しだけ気を漏らしてたんですけどね。
降りましょうか。）

《神鳴流の創設者》

この新しい都に移る前から、色々な魑魅魍魎が姿を現していた。
このまま奴等に怯え続ける訳にも行くまい。
この体に流れる『気』。
これを使えば妖どもと戦える事もわかった。
なればこそこの力を使い、人々を守ることこそが我等の役目だろう。
…しかし、私も少し歳をとった。
今の私の役目は、未来ある若者に技術を語り継ぐ…む？
少し強い気の気配…あの木か？
目を向けてみると木の上には…一人の女性？
変な緑色の服を着た女がこちらを見ていた。
私が目を向けたのに気づくときょろきょろと辺りを見回し、自分自身を指差した。
少し女を睨みながら頷くと、困り顔をして木から降りて来る。
「全員、やめっ！こっちに集合せよ！」
「「「はいっ！！」」」

弟子達が集まる。

「そこの者よ、何をしている？」

木から降りた女に声をかける。

「いやー…ちょっと対魔の一族の噂を聞き付けたもので、気になって来ちゃいました…」

てへへ、と笑う女。

「我等の事を、そんな理由で勝手に見ていただと！？」

「ふざけた事を…この術は我等に伝わる秘技だぞ！？」

「貴様のような輩がおいそれと見て良いものではない！」

弟子達が口々に叫ぶ。

「門下生になるにしても、入口から弟子入りを頼みに来れば、我等は門扉を開いたのだが…勝手に見たとなれば、それ相応の報いを受けてもらうが…？」

殺気を込めて睨みつけるが、女はどこ吹く風と澄ましている。

「それはそれは、どうもすみません。

…しかしながら、一言言わせてもらいますけども。

正直言って、本当に強い妖怪が出たら、あなた達では叶いませんよ？」

一瞬の沈黙の後、弟子達が激昂する。

「静まれっ！！」

一喝。

…女が軽くし口笛を吹いたのを見て少し腹がたったが、押さえ込む。

「…それだけ言い切ったのだから、さぞや立派な理由があるのだろう。

お聞かせ願いますかな？」

皮肉のような言い方になってしまったが、これだけはしっかりと聞いておきたい。

「いいですよー…といいたいのですが、口でいくら言っても信用しないでしょうし…」

女はどこからか、反り返った剣を取り出していた。

「こっちの方で、教えてあげましょう。」

《三人称》

「…師範。私に行かせてください。」

声をあげたのは、この時代の神鳴流剣士の中ではトップクラスの実力を持つ若者。

「よかろう、行って来い！」

「はいっ！」

前へと一歩進み出る。

「女、名は？」

「…はあ…」

美鈴は溜息。

「もし私が妖だとして、そうやって名を問い掛けるんですか？
相手が本当に敵とわかったなら、言葉なんてものはいらないんですよ。」

「…参る！」

反論できず、勝負を仕掛けに行く剣士。

（形は異国のものであろうが、見た所普通の剣…なら、一太刀で叩き切る！）

「せやぁっっ！」

気で強化された剣は、普通の剣に比べて全く強度が違う。

打ち合えば、一撃で確実に叩き折る事ができる程。

動かない美鈴を見て、師範や弟子達は勝利を信じて疑わなかった。

しかし…

ガキンッ、という音。

それは、刀の折れた音。

「な…？」

折れたのは、弟子の方の剣。

「相手の力くらいはちゃんと見切りましょうね？」

一瞬呆然とした弟子に一言だけ声をかける。

直後、弟子の体が吹き飛び転がった。

美鈴は掌を突き出した格好。

「こういう感じで、つまる所剣術しか無いから地力で負けてるとどうしようもないんですよ。」

こんなふうにね。

そう言った直後、見えない重圧が神鳴流の者達を襲う。

「ぐっ…！？」

「ぬぉっ…！！」

その重圧に、師範すらも膝をつく。

しかしただ一人、この重圧を理解したのも師範のみであった。
（これは…ただの気の塊…！？
圧倒的過ぎる…っ！）
「とまあ…ぐだぐだ言ってもあれですし、お節介でしたか？」
重圧から解放された。
皆荒い息を吐いている。
その中で、師範がいち早く起き上がって頭を下げる。
「…いや、私達も対魔の一族だという事で少し調子に乗っていたのかもしれん…
先程の無礼、お許しいただきたい。」
「い、いえいえそんな。
私の方こそいきなりしゃしゃり出ちゃってすいません。」
両方とも頭を下げる。
師範は感謝の意を込めて。
美鈴は謝罪の意を込めて。
「それで不躾だとは思うが、我等には何が足りないと思う？」
「…心技体のうち、心と体は大丈夫だから…技、ですかね。

ここぞという時に出すような、必殺を誓うほどの技。
ですかねぇ。」

「なるほど…ご助言、感謝させてもらう。」

「いやいや、いいですって…
そ、そろそろ私は行きますね？」

「ああ…私は、そしてこの神鳴流を継ぐ者達は、今よりもずっと強くなる。
それを見るために、時々見に来てはくれないか？
妖の強者よ…」

一瞬目を見開いた後、たははと笑う美鈴。

「気づいてましたかー。」

「巧妙に隠されていた故、気づくのは遅かったがな…」

「約束しましょう。時折この地に来て、神鳴流を見ていきましょう。
ふふ、それまで代々語り継いでいくといいですよ？」
「…肝に命じておくよ…」

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

紅美鈴は、まだ雛のような神鳴流の戦士達と出会った。
この後約１６００年以上のの長い付き合いとなる、剣士達との始ま

りであった。

約６００年が経ちました。（後書き）

古い言葉なんてわかんないｗ

古文苦手ｗ

許してくださいｏｒｚ

魔法世界って何ですか？（前書き）

ちゃっちゃか投稿。

書くこと無いのよねこの時期は。

魔法世界って何ですか？

先日、とある裏通りの酒場で面白い話を聞いた。

「魔法世界ですか？」

「おや、そっち側の人間じゃなかったのかい？」

「いえ、確かに裏の人間ではありますけど…ちょっと聞いたことなかった物でして…」

「ハハハ、そうかい！
魔法世界ってのはその名の通り、こっちの世界…旧世界と違って日常的、文化的に魔法が使われてる世界なんだがな？」

なるほど…確かにそれは面白そうな…

幻想卿とはまた違って、ちゃんと発展を続けている世界らしい。

「まあまだその世界を知ってる奴は多くも無いし、無理も無いか？
こっちの世界よりもかなり発展してるからな、面白い物が見られるだろうなー！」

ガハハ、と笑う男。

「なるほどー…」

「あっちについて色々知りたいなら、まずはアリアドネーへ向かうと良いぞ？」

「アリアドネー？」

「おう、独立学術都市国家アリアドネー。
学ぶ意志と意欲があれば、どんな存在でも受け入れる国家だそうだ。
」

「どんな存在でも？」

「ああ。
なんでもアリアドネーには普通の人間もいれば亜人達もいるし、対立している部族同士が隣同士の机で勉強しているし、元犯罪者と警察官が勉学を教え合っているらしいからな。」

「…大丈夫なんですか、それ。」

普通なら問題が多いだろうに…

「ああ、やりすぎなければ基本はな。
自治国家だからもちろん法はあるし、ちゃんと戦力も保有してるし。
さっき言っただろう？学ぶ意志と意欲さえあれば、どんな存在でも受け入れると。」

「なるほど…ありがとうございます。」

「はっはっは、気にすんな！
あとこの話、表の人間にすんなよ？
頭おかしい奴に見られるからな！」

「勿論ですよ。それでは。」

飲み物と、情報をくれた人の分の代金を置いて店を出る。

魔法世界…今までに見た事が無いから、とても楽しみである。

とりあえずゲートとやらを探さないと…

…あれ？でも、ゲートって普通の人が魔法世界に行くために必要なものであって…

「…座標さえ特定できればいらないかなー？」

あっはっは、なーんだ、簡単じゃ無いかー。

「えーと…座標検索…魔法世界のアリアドネーだったよね。

…火星？何だってそんな所に…あ、なるほどー。

作られた世界…？

まあ、いいや。えーと…

西の方…あった。」

では…

「いざ、魔法世界へ！かな？」

その日、天へと昇る一匹の龍を見たという情報が相次いだ。

「ようこそ、アリアドネーへ！
私たちは学ぶ意志のある者なら、どんな存在でも受け入れます。
それが王でも、犯罪者でも…」

「ありがとうございます。
私は一介の旅人なのですが、時間は有り余っているので、ここで色々知識を蓄えておこうと思いまして…」

「そうなのですか…」

おや、少し反応が悪い。

「やっぱりまずいです…かね？」

「あ、いえいえ！そうではないんです。
勿論、知識を求める事は大歓迎なのですが…」

話を聞くと、どうやらここでは滞在するにあたって一年ごとにある程度の課題をこなさないとならないようだ。

…まあ虫が良すぎるとは思ってたよ。

うーん、となると…

まあ、とりあえずは色々見てみないとわからないし…

「じゃあ、とりあえずは入る学科とかを見て回らないとなぁ…」

「はい。
課題を出して問題行為さえなければ、資料の閲覧等は自由ですので、

ごゆっくり勉学を修めてください。
…と、その前に一応いくつかの書類に書いてもらう事があるのですが…」

「お安いご用ですよー♪」

《アリアドネー騎士団の一人》

今日このアリアドネーに訪れたのは一人の旅人。

それだけなら特筆すべき事はない。

問題はそこではない。

彼女は、この世界のどの生物とも気配が違った。

こっそりと探査魔法をかけたものの、該当は無し。

全く未知の存在ということだ。

勿論アリアドネーの方針に変わりは無い。

彼女を受け入れるのは当然の事。

もし悪事を働くことがあれば、その時に捕まえれば…いけない。

無意識のうちに警戒しすぎていたようだ。

今は彼女を歓迎しよう。

２年が経つ。

彼女は色々な学科を回りつつ、資料などで情報を集める事を繰り返していた。

驚くのは、色々な学科の課題発表した物だ。

魔法世界では小さな事は魔法を使うことが殆どだ。

しかし、彼女は違った。

薬学の課題では、魔法薬に頼らず薬草などで怪我や病気を治す方法。

一般的には毒草と思われていた草が、様々な薬の効果を促進させる事が出来るというのは驚いた。

魔法学科では、魔法媒体の開発にも携わった。

魔法の発動媒体には皆杖を使う。

彼女はアリアドネー騎士団の一人に話を聞いていた。

「剣と杖、一緒に持って邪魔じゃ無いですか？」

「え？ええとまあ…時々…」

「じゃあ、邪魔にならない魔法媒体作ってみます。」

要約するとこんな感じで、彼女は指輪型の魔法媒体と魔法媒体としての剣を作り出した。

剣はそこらの剣よりも強度は少し落ちるものの、極めれば詠唱しつつ接近戦をしかけるという事が出来る。

従者がいなくなったとしても、自衛の手段どころか反撃が出来るのだ。

指輪も見栄えがよく、魔法の使い心地は杖と比べても遜色が無い。

これまでの杖を根底から打ち砕くようなものだ。

「まあ、ここから更に指輪や剣を強化するのは難しいかもですけどねー。」

アハハ、と彼女は笑っていたが、人々が試そうともしなかった事を平然とやってのける彼女を皆尊敬している。

そのおかげで他の人々も向上心を上昇させている為、アリアドネーにはかつてない活気が訪れている。

いるのだが…

「やはり行ってしまうので？」

「元々気ままな一人旅ですしねー。

調べたい情報は大体揃ったんで、そろそろ行こうかなーと…」

「そうですか…」

「まあまた戻って来るかもですけどねー。
いつになるかはわかりませんが。」

「アリアドネー一同、心よりお待ちしてますよ。」

「ありがとうございますー。
では…」

「はい。」

言葉も荷物も少なめに、紅美鈴と名乗った女性はこのアリアドネーを去って行った。

後日、紅美鈴が『革命者』『微笑む才女』と名付けられる由縁となる訪れであった。

魔法世界って何ですか？（後書き）

次回辺りでようやく物語の本格的スタートかな？

見てくれてる方がいらっしゃれば、次回もお楽しみに。

因みに私はコミックスしか読んでないので（しかも終盤揃ってない）、続くとしても拳闘大会までかな？

ある少女の誕生日。（前書き）

あれれ、何がどうしてこうなった？

ある少女の誕生日。

私、エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マグダウェルは、１０才の誕生日を迎えようとしています。

お母様もお父様も、私の晴れ姿をとても楽しみにしてます。

でも…口には出さないけど、私が一番楽しみです…。

お母様からもお父様からも愛されていて、私はとても幸せです。

でも、この時私はまだ知る由も無かったのです。

幸せである筈の誕生日が、最悪な形で私の人生の分岐点になるなんて…

誕生日当日の朝。

私が最初に感じたのは、動かない身体と息苦しい感覚。

そして、何かが胸を締め付けているような痛みでした。

苦しみにより重い瞼を開けると、

そこはもう『日常』ではありませんでした。

「おや、気がつかれましたかな？」

「え…？」

自分の身体を見る。

円形の何かの台…だろうか？

その上に、大の字で張り付けにされている。

服はちゃんと着ている。

手は…拘束用の魔法だろうか？

手首になにか腕輪のような光がついており、手を動かすことは出来ても手首は動かない。

足にも同じような物がついているのだろう、やはり動かない。

自慢の長い金髪は、台の上から無造作に散らばっている。

「この術式を思い付いてから、苦節３５年…いやあ長いものでした。まあそれも、ここで成就することになるのですがね」

「何を、言って…？」

「ここにいるのが誰か、おわかりですかな？」

と言って、カーテンで隠されていた一角を開ける。

「…っ！お母様！お父様っ！」

「き、キティ…」

「ぐうっ…！」

お母様とお父様の手足には、大きな杭が刺さっていました。

血がどんどんと流れ出て、このままではすぐに死んでしまう事は明らかでした。

「お母様とお父様を放してっ！なんでこんなことするんですかっ！？」

「術式を試すのですよ。言ったでしょう？

とりあえずまあその為にはこれが必要だな…」

取り出したのは杖と、大振りな2本のナイフ。

そのまま、杖を構えて詠唱を始める。

「っぐうっ！うぐぁぁぁっ！？」

「キティッ！？」

突如、全身が鋭い痛みと快楽に襲われる。

あまりにもいきなりの衝撃に、身体が跳ね、生理的な涙がこぼれる。

「ふむ、術式は順調に発動してますね。
では次に…」

そう言って、ナイフを持ってお母様達に近づいていく。

「な、何するの！？やめてっ！」

「おや、話せるんですか。
意外にも芯の通った強い子ですねぇ。
なぁに、安心してください。べつにあなたに痛いことをする訳では無いですので」

「くそっ！私達はどうなっても良い！だから、キティだけは解放してやってくれ！」

「お父様だめっ！私が犠牲になるから…」

「そんなことを言わないで、キティ！キティは生きるの！」

突然、男が笑いはじめる。

「あっはははは！
いやあ見事な親子愛！
私は感動しましたよ！
それに免じてエヴァンジェリン、あなたの言うことを聞きましょうっ！」

言った瞬間、持っていたナイフでお母様達の心臓を突き刺した。

「え…？」

身体の痛みも快楽も忘れて、呆ける。
だって、私の言うことを聞くって…
「何故？という顔をしてますねぇ？
だって、自分で言ったじゃ無いですか。
「犠牲になる」と。
それは私の術式を受けると言うことでしょう？」
だからその代わりに、母様達を解放してほしいと…
「喜ばしいことに、私の術式は貴女の両親の死亡が大前提なのですよ。
どうやって自分で両親を殺させようかと考えていましたが、いやあ
僥倖でした」
え…
それって…つまり…
「間接的に、両親を殺したのは自分だと言うことですねぇ。
まあ、どちらにしても結末は変わりませんがね。
あっはっはっはっはっ！」
さも愉快そうに笑う男。
…許せない。
こんな外道を、許すわけにはいかないっ！

「さて、最終段階と行きましょうか」

「ーーーーーっ！」

もう声すらも掠れて出ない。

苦しい。痛い。気持ちいい。気持ち悪い。

ぐるぐる混ざって、訳がわからなくなる。

しかし、意識が飛びそうな私を繋ぎ止める物がある。

殺したい。

この男を。

斬り殺したい。刺し殺したい。頸り殺したい。叩き殺したい。吹き飛ばして殺したい。

そう、それは純粋な殺意と、憎悪。

「そうだ！それでいい！
このまま行けばすぐにでも…！」

「ーーーーっぁ」

プチン、と身体の中の何かが切れた音。

断続して、頭に響く。

「む、毛細血管が切れてきたか。
急激な身体の変化に耐えられなくなったか？
まあ、成功すればどうせすぐに治るんだ、問題は無いか」

もう声も聞こえない。

景色がチカチカと光り目からは涙を流し、口からだらしなく涎を垂らし続け、股からは愛液がこぼれ落ちる。
身体はガクガクと痙攣を続け、握り締めた手からは血が滴る。
ああ、思考が遠退く。
ああ、視界が真っ赤に染まっていく。
ああ、力が漲る。
ああ、喉が渇いていく。
アア、オ腹ガ空イタナァ…

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

エヴァの身体の動きが止まり、魔力が収束していく。

男は荒い息を吐くエヴァの口を開き、覗き込む。
男の顔が喜悦に歪む。
「…成功だ。ふひ、ひはははははは！」
口にあったのは、長く伸びた鋭い犬歯。
彼が行ったのは、人間の吸血鬼化。
幼い頃から吸血鬼という存在に憧れ続け、その憧れは狂気となって彼を駆り立て、とうとう術式を開発し、それもたった今成功した。
「あは、あはははは、ひゃはははは！ひーっはっはっはっは！やっぱり、私は素晴らしい！できたじゃないか！ここに！完璧な吸血鬼がっ！」
ひとしきり笑い終えた彼はふと考える。
正しい方向に使っていれば、天才という言葉で表されるであろうその頭で。
「実験さえ成功したなら、このガキはもういらないな。持ち帰ってこの身体を嬲るのも面白そうだが、今のこいつは吸血鬼…まともに抵抗されれば、壊されてしまうか…
…放っておくか？
どうせ吸血衝動か破壊衝動に呑まれて壊れるだろうしな。魔法で見張って、その苦しむ姿を楽しむのも一興か。動かなくなったら拾って、観賞用にでも…がっげべ！？」

突然、男の頭が吹き飛んだ。

即死だ。

男を襲った存在――吸血鬼となったエヴァは動かなくなった男の身体を見て、噴怒に顔を染め、男の身体を蹴りの一撃で吹き飛ばした。

「ハアッ…ハアッ…！」

大きく息を吐き、気持ちを落ち着ける。

「わ、たし……う、あああああぁぁぁぁ！！」

両親や、親しい者達の死。

人々から忌み嫌われる吸血鬼化。

憎しみに身を染めての、初めての殺害。

様々な要因が重なったその日、少女の慟哭の叫びが血染めの屋敷を満たした。

大きな満月が地上を照らすその日の夜。

マグダウェルの屋敷は炎をその身に纏っていた。

燃える。燃える。思い出の場所が。

一緒にご飯を食べた食堂が。一緒に遊んだ庭園が。一緒に勉強した

自分の部屋が。
燃える屋敷を眺めるエヴァも目から、また涙がこぼれ落ちる。
しかし気丈にも、その涙を振り払った。
母は、自分に「生きろ」と言った。
だったら、生きてやる。
人々から忌み嫌われていようと。
とことん生きて、幸せを掴む。
それが、理不尽な死に方をした両親への、せめてもの親孝行だ。
後を追う事はしない。
いや、出来ない。
吸血鬼となったこの肉体は、滅多なことでは死にはしない。
ならば。
「…私は、生きます。
見ていてください、母様、父様…」
一度目を閉じる。
目を開けた時には、そこには強い意志が灯っていた。

…しかし、振り返って歩きだそうとした時。
エヴァは気づいた。
ちょうど歩いて15歩程の距離。
よくわからない服を着た、一人の女性。
笑顔で、人のよさそうな笑顔で、エヴァを見つめていた。
「吸血鬼…ですか」
一言を発した瞬間、ナニカが背中を走り抜けた。
恐らく、悪寒。
人とは違うナニカだと、認識させる圧迫感。
しかし、同時に心を埋めるものがあった。
きっかけがあれば、すぐにでも壊れてしまいそうな脆い心。
その中に、入ってきたのは安堵。希望。歓喜。
なぜ自分はこんな感情を持った？
なぜ自分は安堵した？

なぜ自分は希望を見た？
なぜ自分は歓喜した？
戸惑いがエヴァの頭の中を満たしていく。
…紅が、金に近づく。
「…まさか、こんな所で産声を聞けるなんて…
１００年違うし髪の色も違うから、お嬢様とは別人でしょうけど。
…でも、いい目をしてる」
動けないエヴァ。
頭の中では、変わらず自問自答が繰り返されている。
なぜ、なぜ、なぜ。
しかし新たに目覚めた吸血鬼としての本能と、人間としての本能が、
無意識のうちにエヴァに語りかけていた。
ああ、この存在は、私の母だと。
腹を痛めて産んだだとか、遺伝子がどうのとか、そういう話ではない。
これはまるで――。
「気に入りました。
もしかしたらこれも運命かも知れませんが…

一緒にいきませんか？
エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マグダウェル？」

差し出された手を、無意識の内に取る。

エヴァは気づいていなかった。

先程まで絶望で表情を無くしていた顔が、涙混じりの笑顔となっていたことに。

ある少女の誕生日。（後書き）

前話といい今話といい、伏線をばらまいておく。

回収…しろよ？私（笑）

そのうちＦａｔｅみたいな感じのステータス表でもあげときます。

？妖怪と吸血鬼。（前書き）

短いな…まあ、今回は状況説明のみ。
会話多め。

？妖怪と吸血鬼。

「目が覚めましたか？」

目を開けて、起き上がった私が最初に見たのは鬱蒼とした森。

そして、緑の服を着た女の人。

「だ、れ…？」

「先ずは落ち着いて、昨日の事を思い出してみてください」

昨日…。

昨日って確か、私の誕生日で…っ！？

「思い出してきましたか？

大丈夫ですよ。ゆっくりと、一つずつ」

「ああ、あ…っ！」

ああ、思い出した。

早々忘れることなど出来ない、絶望。

…ふわり、と何かに包まれた。

「大丈夫ですからねー。

安心してください。

私はあなたの味方ですから…」

「う…っ、ひぐっ、うぅ〜…！」

やっぱり、私の心は弱い。

昨日吹っ切ろうと心に決めたはずなのに。

名も知らぬ女性は私を抱きしめ、ただ背中と頭を撫で続けた。

「落ち着きましたかー？」

「あ、は、はい…」

抱きしめていた体が離れていく。

…ちょっと寂しいかもと思ってしまったのは内緒だ。

「さて、改めて…

私、紅美鈴って言います。

色の一つの紅色（べにいろ）に、美しい鈴、と書いて「ほんめいりん」です。

美鈴（めいりん）でいいですよー」

「あ、はい…」

「そして…」

と、突然美鈴は自分の胸を自分の手で突き刺した。

「え…？」

「あ、ちょっと落ち着いて…ほら。」

腕を引き抜くと、巻き戻しのように傷が塞がっていく。

まさか…

「あなたと種族は違いますが、この通り人外をやってます」

…驚いた。

目の前で傷が塞がったのもそうだし、こんなに簡単に自分が人外だとばらすなんて…。

「まあ、ちょっと事情があって種族は言うことが出来無いのですが…」

「はあ…」

なんというか、色々とこんがらがってきた…

とりあえず、聞きたい事を一つずつ聞いていく事にする。

「えっと、美鈴さんはどうしてここに来たんですか…？」

「美鈴でいいですよー。

…まあ、私はただの旅人なんですよ。

適当にふらふらと、この世界を渡り歩いているんですねー」

「じゃあ、ここに来たのは偶然…？
あと、何で私と一緒にいるの…？」
そう聞くと、美鈴…はクスリと笑った。
「2年程前に、マグダウェル家の一人娘の噂を聞きまして…
「その容姿はまるで人形のように完璧」だとか、「芸術品」だとか
…ね？
折角だからその子を見に行ってみようかとね？」
…なんだか恥ずかしい。
「顔赤くしちゃって、可愛いですねー♪
まあそれでマグダウェル家を訪れたらなんとまあ家が燃えていて…
そこから出て来た一人の娘。
しかも魔の匂いをつけている、となれば、マグダウェル家に何かあ
ったんだろうな…と考えまして…」
「……」
「あーっと…なんて呼べば言いですか？」
「エヴァでいい…」
「じゃあエヴァ。
一つだけ言っておくけれど…」
いきなり空気が少し重くなったような感じがした。

今から美鈴が言うのは、きっととっても大事な話なんだろう。

「この世界は、エヴァみたいな子供が一人で生きるにはとても厳しい世界です。」

「うん…」

わかってる、それくらいは。

いくら心の中で覚悟を決めようとも、現実では何が起こるかなんてわからない。

「もしも吸血鬼だとばれたなら…まあ恐怖の象徴として火あぶりか、教会の馬鹿共に慰み者として使われるかのどっちかですかね？そんな結末は嫌でしょう？」

一瞬想像して、吐き気が起こった。

特に後者。

すぐさま頷く。

「ですよねー。

まあ吸血鬼としての力を使いこなせれば、定かではないですが…

エヴァちゃん、真祖の吸血鬼（ハイ・デイライト・ウォーカー）ってどのくらい知ってますか？」

「えーっと…確か、一般的な吸血鬼の弱点が殆ど効かない吸血種の頂点で最強種の一つだって、お父様が読んでくれた本に書いてました…」

「うん、だいたい正解ですね。
ですけどなりたての真祖は残念ながら、光も水も十字架も完璧に克服できたとは言えないんですね。
エヴァがなったのはこの真祖と呼ばれる吸血鬼なのですが…」

…私が、伝説種？

なんというか、実感があまり無いんですけど…

「さっきから少し体調が悪かったりしませんか？
目眩とか、吐き気とか…あと、眠気？」

「…確かに、ちょっとだけ…」

「昨日まではただの人間だった者が、いきなり吸血鬼になった訳ですからね。
今後１０年程は、昼間には少し体調が悪くなると思いますよ」

「１０年っ！？」

１０年って…そんなに長い間、この症状に悩まされないといけないって事？

「まあ身体の具合には少しずつ慣れて行くでしょうから、あんまり苦にはならないと思いますよ。
少なくともそれまでは、エヴァの傍にいてあげますから。」

…まただ、何だろうか、この安心感というか…

「それでですね、エヴァちゃんには力の使い方を学んでもらわないといけません」

「力の使い方？」

「はい。というのも…言うよりはやった方が早いですかね」

そう言うと、焚火に使った残りであろう木を掴む。

「今からエヴァちゃんにこれを投げますから、ちゃんと片手で掴んでくださいね？」

「え、あ、はい…」

返事に満足したのか、ポイッと投げ渡して来る。

それを片手でしっかりと掴む。

自分で言うのも何だが、私は力が無い。

まあそれはまだ１０歳という年齢であるし、割と身分も高かったから当然とも言えるが。

…しかし私が片手で掴んだ木は、文字通り木っ端微塵に弾け飛んだ。

「…え？」

もうそれしか言えない。

呆然とするしかないだろう。

「私の言った力の使い方の意味、わかってくれましたか？」

それは、こんな現実を見せ付けられれば当然だと思う。

「もし力の使い方を覚えておかなければ、握手した時に相手の手がこうなりかねないですしね。

さて、時間が時間ですし、とりあえず近くの街に移動しましょうか。

あ、太陽を直視しちゃいけませんよ？」

空を見ると、太陽はもう天上近くまで登ってきていた。

「さ、行きましょうか」

無言で頷き、差し出された美鈴の手を握って歩きだした。

？妖怪と吸血鬼。（後書き）

さて、明日からグッと忙しくなる…
更新はちょっと遅れるかも。

さて、これからどうします？（前書き）

ぐだぐだ…

やりたい事が幾つかあるけど、順番が決まらない…

さて、これからどうします？

森からそこそこ歩いた場所。

そこには、一軒のログハウスが建っていた。

「美鈴、これって…？」

「ああ、私の拠点の一つですよ。

さすがに立ち寄るところくらいは作っておきたいので」

美鈴とエヴァはサンドイッチやキッシュ、フィッシュ＆チップス等の（現代のものであり、決してこの時代のものではない。）イギリス料理に舌鼓を打っていた。

しかし、エヴァの顔は…。

なんというか、微妙な顔だった。

別に料理が美味しくなかった訳ではない。

寧ろ、一流の料理人が作った料理を食べていたエヴァが食べても、普通に美味しい料理だった。

ならばなぜそんな顔をしているかというと…

（なんでここについた瞬間からテーブルに料理が並べてあったんだ

ろう…）

そうである。

エヴァがこの家に入った時には既にテーブルの上で料理が美味しそうな香りをたてていた。

驚いて停止してしまったエヴァの肩を叩いて食べようと促してくれたのだが、やっぱり不思議なものは不思議である。

「あの、美鈴…」

「あはは、何回も言いますけど、気にしないでください」

「でも…」

「わかりましたか？」

言い淀むエヴァをぴしゃりと遮り、笑顔で問い掛ける。

「…うん」

「わかればよろしい」

おどけた様子で答え、また食べる。

何だかんだでお腹は空いていたのか、３０分もすれば皿の上の料理は殆ど姿を消していた。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

「ふう、大分料理も少なくなったし…

エヴァ？」

「？

どうしたの、美鈴？」

不思議そうに尋ねるエヴァ。

「昨日の夜、私はエヴァに問い掛けたよ？

「私と一緒に来るか」って…」

「あ…」

その時に感じた自分の感情が頭を過ぎる。

「あの時エヴァは私の手をとったけど、多分無意識のうちだったでしょう？」

…確かに。

あの時の私は混乱していた。

頭がこんがらがっていて、何も考えられないような状況だった。

…でも、ここまで歩いて来る間にずっと考えてた。

「改めて聞きますけど、これからどうします？」

「美鈴について行きたい。」

自分でも驚くほどに、スッと口から出てきた。

「…あはは、随分あっさり決めますねぇ。
どうしてです？」

「…私には、もう何も残ってないんです。
頼れる存在も、愛しい人も、帰る場所も、そしてやるべき事も。」

そう言うと美鈴は、またクスリと笑った。

…癖なのかな？

「勿論いいですよ。
そして、更に選択肢。
光の道か、闇の道か」

？？？

「…急に言われてもわかりませんよねぇ」

そこで咳ばらいを一つたて、人差し指を立てる。

…何て言うか、「白魚の如く」という表現がしっくりきそうな綺麗な手だった。

「まず光の道…まあ、いわゆる善の道ですね。
人助けしたり、人を守ったり、誰かの為に生きるっていう生き方。

ですが、これは少し難しい」

「なんで？」

「人助けや善行以前に、「吸血鬼」という存在っていうだけで、それは既に恐怖の対象になるからです。
人を助けてもにエヴァに害する意志が無くとも、吸血鬼というだけで人は恐れ、逃げ、襲う。
まあ何十年と続けたり、一度に大量の人を救ったりすればわからないですが…」

…救った人間から石を投げられるのは、結構心に響きますよ？

美鈴は最後にそう締めくくった。

黙りこくった私を見て、中指を立てる美鈴。

「で、次に闇の道…
簡単に言えば、自らを悪だと誇り、驕らず、闇の王として君臨する…」

「王って…」

「真祖の吸血鬼であるエヴァなら、その資格は十分にありますからねぇ。
しかしさっきも言った通り、吸血鬼は恐れられる存在。
この場合、人間からは恐れられつづけ、自分を狙う者には事欠かなくなりますけどね…」

「…美鈴は、どうするの？」

今美鈴が言ったのは、私だけの話。
気になったのは、美鈴自身の事。
「あはは…。
特にやることもないですし、これからも色々な所を巡るつもりですよ？
その道中でエヴァを助けつつ…って感じですかね？」
助ける…？
「はい。
いくら種族としてのスペックが高かろうと、それをすぐに使いこなせる訳じゃない。
いくら善を目指していようと、それをすぐに受け入られる訳じゃない」
そこで美鈴は一度言葉を切る。
「言ったでしょう？
私はエヴァの味方だって」
…また意味も無く涙が出そうになる。
必死で堪え、言い放つ。
「私は、光に生きたい。」

「…エヴァなら、そう言うと思いました。」
また美鈴はクスリと笑う。
「今のエヴァみたいな可愛い子には、闇は似合わないですよ」
「可愛いって…」
き、急に何を言い出すのだろうか、美鈴は…
「あ、魔法って知ってます？」
唐突に話を切り替える。
「魔法…」
「はい。…まあ知ってると思いますけどね」
「……」
勿論知っている。
もう少し小さい頃にお父様の知り合いの魔法使いに会ったことはあるし、何より私を吸血鬼に変えたのも魔法だ。
「…嫌な事思い出させちゃいましたかね、ごめんなさい」

「あ、いや…」
謝る美鈴に慌てて遠慮。
吹っ切れない私が悪いのに…
「ま、魔法の事なら知ってます…」
「そうですか、それなら話が早いですねぇ。
吸血鬼って個人差と使える属性に違いはありますけど、皆魔法が使えるんですよ。
しかも天才レベルで」
「天才レベル…本当に？」
「はい。ちょっと試してみますか？
まあ勿論、最初は慣れてないから上手くいかないと思いますけど…」
「う、うん！」
「ふふ、じゃあちょっと待っててくださいね？」
そう言って、美鈴は奥の部屋へと入っていく。
恥ずかしい話初めて魔法を見た時から、魔法を使ってみたいと常々思っていたのだ。
「はい、お待たせしましたー」
美鈴が持ってきたのは、一本の…多分杖と、一冊の本。

「この杖私が作ったんですよ。
あんまり大きすぎる魔力には耐えられない、所謂簡易版ですけどね」
そう言って杖を手渡して来る。
少し細い木の枝に細い布が巻き付けてあり、手に持っても固さを余り感じなかった。
「それでですね、えーと…」
持ってきた本のページをパラパラとめくる。
「あ、あったあった。
ちょっとこっちに手を置いてください」
美鈴が開いた所には、両方のページに魔法陣みたいな複雑な模様が書いてある。
指指したのは左のページ。
そこに手を乗せると、美鈴は反対側のページに手を乗せた。
「今まで魔法を使ったことない人は、まずは魔力を持っているということを自覚しなきゃいけないんですよ。
折角大量に持っていても、それをわからなければ宝の持ち腐れですからねー。
あ、ちょっと身体がむずむずするかもしれませんけど、我慢してくださいねー」

「え？それってどういう…」
事なの、と言おうとした瞬間。
「っっっ！？／／／／」
背筋に電流が走った。
いや、おそらく錯覚だろうけど。
あまりにいきなりすぎて、咄嗟に手を放してしまいそうになる。
「あれ？…一度に流す魔力が多すぎたかな…。
まあいいかな？ここでやめて生殺しもあれだし」
いや、お願いだからやめてほしい。
そう言おうとしたが、自分の吐く息が荒らすぎて喋る事が出来ない。
…なぜかデジャヴュを覚えるのはなんでだろう？
そんな事考えてる間に、また違う感覚が身体を襲う。
沢山の何かが身体の中で暴れている。
「めー…りん…い…たぃ…！」
半泣きになって、それでも何とか口に出す。
「多分、身体の中で魔力が発現しているんですね。

ちょっと痛いですが、あと少しで終わりますからねー。
それにしても…ふむ、凄い魔力ですねー…」

他人事みたいに言ってくれる…

口に出すのは難しいが…何と言うか、一歩間違えば身体が爆発してしまいそうな痛みなのだ。

しかも、なまじ痛みだけでは無いだけに始末に終えない。

まだか、まだか、と息を殺してできる限り耐える。

「…ん、よし、と。
はい、終わりです」

唐突に刺激が止まる。

丁度少し慣れてきていたという所でいきなり刺激が止んだ為、身体が対応できない。

…恥ずかしながら、気絶した。

本当恥ずかしい。

…くすん。

さて、これからどうします？（後書き）

グダグダ長くなるのもあれなので、ここで一旦切ってみる。

魔法の練習してみます。（前書き）

最初の方のエヴァは、脳内妄想して激しく身悶えた。

魔法の練習してみます。

目を開けた私が最初に見た物は、綺麗な木目の天井だった。

上半身を起こし、ボーッとしてみる。

なんか気怠く、体が重い。

…あと、身体の中に何かある。

自分の中の何かを包む、巨大で、でもとても冷たい何か。

これって…？

「あ、起きましたかー？」

「…めーりん」

「ずっと寝てましたよー？
ざっと４時間って所ですかね」

４時間。そんなに寝てたんだ…。

窓から外を見ると、日が沈み始めていた。

「もう夕方ですから今日は座学というか、とりあえず魔法の基礎を
教える事にしましょうか。
ちょっと休んでからですけど」

「うん…」

体がだるいので、その申し出はありがたかった。

というか、何で寝てたんだっけ？

とりあえず美鈴に聞いてみる。

「ありゃ、覚えてませんか？

魔力を自覚させるための儀式でちょっと想定外の事態があって、身体に負担がかかったんですよ。

だから今まで起きなかったんですねぇ」

「魔力…っっっ！！／／／」

思い出した。

何か色々あって頭がグルグルして、痛くて、でも気持ち良くて、訳わかんなくなっちゃって…

「…その言い方だと色々誤解を招きますよ？」

「考え読まないでよっ！！／／／」

「口から出てましたよ…」

更に顔を真っ赤にする。

美鈴は苦笑しながらも、どこかその顔は楽しそうだった。

真っ赤な顔を見られたくなかったので、かけてあったシーツを頭からかぶってソファーに倒れ込む。

…あれ？

「…何かスースーする…」

「下着とワンピースは汚れてしまったので洗っておきましたよー」

そう言って鼻歌を歌いながら別の部屋へと消えていく。

「…えーっと…」

美鈴が言った言葉を咀嚼する。

飲み込む。

理解する。

「っっっっ！？／／／／」

慌てて自分の身体を見る。

私とはサイズの合わない、ぶかぶかのYシャツが一枚だけ。

そう、一枚だけだったのだ。

ログハウス内に、甲高い悲鳴が響き渡った。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

部屋のソファーには、身体を隠して頬を膨らませ、頬が林檎のように真っ赤に染まったエヴァ。
ダイニングチェアーには、苦笑しながら美鈴が向き合って座っている。

「めーりんの馬鹿…」

「あはは、ごめんなさい。
それじゃ、魔法の勉強を始めましょうか」

「絶対反省してないよ…」

「あはは…
とにかく、儀式のお陰で魔力はわかるようになった筈です。
身体の中を血液みたいにめぐりめぐって、最終的には身体の中心へと戻ります。
自覚できますか？」

「え…っと、うん。多分…」

「よろしい。
とりあえずこれ持ってください」

渡されたのはさっきの杖。

「まずは一番簡単な魔法から。
火を起こす魔法です。
ちょっと手本というか、例を見せましょうか」

どこかから杖を取り出す美鈴。

「呪文はこう。『火よ灯れ』」

美鈴が杖をたてながら呪文を言うと、杖の先からライター程度の火が灯る。

「わあ…」

「ログハウスですから、燃え移ると大変なんでこんな規模なんですけどね。
もっと大きくする事は出来ますよ？」

初めて見た、規模は小さくても立派な魔法。

「これは練習の為の魔法と考えても大丈夫ですよ。
さ、杖をたてて」

言われた通りに杖を持つ。

「ただ呪文を唱えるだけじゃあ魔法は発動しないんです。
まずは頭の中でイメージ…。
小さくてもいいから、杖の先から火が出るっていうイメージを…。
出来たら頭の中でそのイメージを保ったまま、さっきの呪文を唱えてみてください。」

頭にイメージは作った。

イメージを作った瞬間、身体の中の魔力が活性化し始めたのを感じ

た。

「…『火よ、灯れ』！」

恐る恐る目を開ける。

「…あらら、一発ですか。

これ、苦戦する人は全く出来無いんですけど…」

苦笑いする声。

杖の先からは、親指大の炎が確かに灯っていた。

私が初めて使った、小さくても確かな「魔法」。

「わぁ～…！」

「あはは、やっぱり嬉しいですか。

それにしてもやっぱり相性はいいのかな？

この分だと上達も早いでしょうねぇ」

「ほんとっ！？」

「はい、本当ですよ～。

幸い魔導書はいくつかあるので、しばらくはここで練習してみましょうか。

といっても、難しい物は置いてないので…しばらくここに住んで、

一通り魔法とかの練習をしたらしたらどこかに移動するとしましょうか？」

「うんっ！！」

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

それからの毎日は、元の家にいた時と同じくらいに楽しかった。

朝起きたら（美鈴が毎日起こしに来る。）まず顔を洗って歯を磨いて、朝の軽い運動。

といっても、身体をほぐすための体操だけど。

それが終わったら、美鈴とご飯。

美鈴のご飯はいつもおいしいです。

食べ終わったら一緒に食器を洗って、洗濯や掃除などの家事手伝い。

たまに街にも買い物に行ったりします。

街ではマグダウェルの家が焼けて家族皆が死んだ事になっていました。

私は生きていますが、それを知られると後々面倒なので、美鈴が魔法を使ってごまかしてます。

ちょっと悲しいですが、それも仕方ないこと…

どうにか割り切りたいと思います。

それで色々やってる内にお昼になるので、私はご飯の手伝い。
将来は私も料理を作れるようになりたいので、頑張ります！
午後には身体を鍛えます。
身体を鍛えると言っても別に筋力トレーニングと言う訳ではなく、普通に身体を動かしたり、力の加減を覚えたり。
未だ私の身体は吸血鬼化に慣れておらず、朝起きてすぐや昼間等は少し身体にだるさがあります。
「早めに慣れておくと、いざっていう時に楽になりますからね。身体を鍛えておいて損は無いですし」とは、美鈴の言。
力の加減を覚える方法は、主にキャッチボールのようなものです。
美鈴が投げるものを、握り潰さずに受け止め、これまた普通に投げ返す。
これは最近上手く行くようになってきて、殆ど失敗しなくなりました。
「エヴァ、行きますよー」
「はぁーい！」
ポイッ、グシャリッ
「あ…」

「あはは…」

…慣れてきたのです。

…本当ですよ？

夕方になったら残った家事を終わらせて、夕御飯の用意。

あと、皿を運ぶ時などの簡単な操作をするときには魔法を使います。

地道な努力が大成へと繋がるんだとか。

夜は、吸血鬼にとって魔力が最大限に使用できる時間帯。

なので、とにかく魔力を使って魔法の練習。

人によって得意な魔法属性は違うらしく、私の得意属性は氷と闇らしい。

「良くも悪くも吸血鬼らしい属性ですねぇ。

ただ、他の属性もちゃんとそれなり以上には使えるようになりますよ」

「そうなの？さっき見た魔導書には、得意属性以外は殆ど使えないって書いてあったけど…」

「それは人間の尺度での話です。

才能も、魔力も、人間とは違いますから。

その気になれば全部の属性を極める事だって出来ますし、相当頑張

ればオリジナルの魔法を作り出すことさえ出来ますよ？
現に私は属性魔法なら殆ど習得してますし…」

「はぁー…」

…本当、美鈴って何者なんだろう。

…話が逸れた。

今の所１番基本の魔法の射手は、氷と闇が３１本、それ以外は５本位なら出せるようになってきた。

美鈴は私の覚えが早いって言ってくれてる。

私自身もどんどん魔法が上手くなって行くのを感じて、とても嬉しい。

明日はどんな魔法を使えるかな…

魔法の練習してみます。（後書き）

長文書こうとすると文がオワタするから書けない。

後、次回更新少し遅れるかも…

ではではー。

旅に出る。（前書き）

お久しぶりですー。

いやあ全然書く時間が無い。

どうにか更新ペースを上げれたらいいんですが…

短め、キンクリ、謎展開の駄文。

纏まらないや…

旅に出る。

美鈴に拾われてから早１０年。

私の身体は成長することなく、けれど私の魔法や家事の腕はどんどん成長していった。

今では、魔法の射手なら苦手なものでも８９本、得意な物なら３００本近い数の矢を打ち出せる。

「そろそろ初級から中級の魔法を学んだ方がいいかもしれませんねぇ」

「本当！？」

「言ってしまうと、もう少し早く学び始めてもよかったんですけどね…。

エヴァの成長速度が早いから、タイミング逃しちゃいまして…ごめんなさい」

たははは、と苦笑しながら謝る美鈴。

「め、美鈴は悪くないよ！

私がのめり込みすぎてたのも原因の一つだし…」

「あははは、ありがとうございます。

一月後にはこの家を出ましょうか。」

確かに、この家を出るというのは少し寂しい。

ある程度の思い出も、楽しい記憶も、思い入れもあったから。
でも、新たに世界の色んな場所に行くことが出来るとなれば、それはとても嬉しい。

「あ、えと、美鈴…」

「はい、どうしましたか、エヴァ？」

「えっと、この家を出て、それからどこに行くの？」

「…ああ、言ってませんでしたねぇ。
ここから遠く離れた極東の島国、日ノ本の国、日本という所です」

美鈴の宣言から丁度一月。

「持ちたい物は私が持って行きますよー」

「え？どうやって？」

「こうやってです♪」

持って行きたい物に美鈴が手で触れると、物がパッと消えた。

「えっ！？」

「で、えいっ」

パッと手を振ると、また現れる。
「な、何々、どうなってるの！？」
「空間移動と空間操作、ついでに遮断と結合その他諸々をあわせまして…。
まあ魔法の一種と考えてくれて大丈夫ですよー」
「わぁー…！」
「まぁ、こんなの出来るの私ぐらいでしょうし、ちょっと便利くらいのものですしー…
…何ですかそのキラキラした目は」
「うぅん♪何でも無い！」
「…教えませんからね」
「ケチ！」
「やっぱり教わる気だったんですか…」
ともかく準備を完了した私達は、遥か遠き東の国へと歩きはじめた。
「…それは、いいんだけど」
「はい？」

一緒にてくてくと歩いている美鈴に声をかける。

「島国って事は、海を渡らないといけないんだよね？
あてってあるの？」

「勿論ですよー」

「どんな？」

「気にしない気にしない」

…激しく不安だ。

それにしても、改めて世界って物凄く広いんだなぁと実感する。
元の家にいた頃はマグダウェルの領内くらいしか行かなかったし、
美鈴と一緒に過ごしているときもそこまで遠出はしなかった。
自分の知らない世界だなんて、何だかワクワクして来ちゃう。

そう思っていた時期が私にもありました。

「じゃあ、今夜はここで野宿ですかねー」

「また野宿…」

野宿が多くて、所謂箱入り娘だった私は未だに慣れない。
「旅をしてたらこんなものですよー。
町につくまでは我慢です」
「うー…」
別に嫌という訳ではないのだ。
静かに虫の声を聞きながら寝ると、とても安心する。
ただ、ちょっと慣れないだけなのだ。
「文句言わない。ご飯作りますから、薪取ってきてくださいねー」
「はーい…」
「あんまり遠くに行かないんですよー」
「わかってるー！」
このやりとりも、既に何回もやったことだ。
適当な薪を拾い、美鈴の所へ戻る。
既にテントを張り終えていた美鈴は、私が戻って来るのを見るとニコリと笑って手招き。
薪を落とさないように歩いて美鈴の所に行って、薪を組み立てる。

「プラクテ・ビギ・ナル『火よ灯れ』」
火を付けるのは、魔法練習中の私の役目。
流石に失敗はしなくなってきている。
美鈴が作ったご飯を食べ、水魔法でタオルを濡らしてお風呂がわりに。
流石に少し物足りないが、まあ我慢だ。
テントにもぐり、布団をかけて寝る準備。
美鈴はしばらく火の番をしてから寝るそうだ。
「めーりん、お休み。
めーりんも早く休んだ方がいいよ？」
「ふふ、ちょっとしたら私も寝ますよ。
お休み、エヴァ…」
「うん…」
既に寝ぼけ眼の私は、おざなりな返事を返して眠りについた。
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
「…寝ましたねー。心配は杞憂でしたか」
エヴァがテントに潜ってから数分、美鈴が言葉を漏らした。

幻想郷での主（姉）を思い出す。

「あの娘は、もうちょっと強がってましたね。
自分は吸血鬼だから、自分で出来るって言ってて。
結局失敗して、私に涙目で泣きついて、それを私が苦笑しながら直していって…
そんなあの娘が４００年で、誰もが恐れる闇の王…」

昔を思い出し、空を見上げる。

「誰だって、月日が流れれば変わるものです。
エヴァはどんな風に変わりますかね？
人の欲望に絶望して悪の道に走るか…
それでも人を信じて善の道に進むか…」

くすくすと、笑顔を崩さずに独り言を漏らす美鈴。

その目には、紛れも無い喜悦が浮かんでいた。

唐突に、火が消える。

風が吹いた訳でも無く、火種が尽きた訳でも無い。

「こっちの予感は大当りでしたか。
いやはや、何とも面倒な事ですねぇ？」

よっこらしょ、と立ち上がる。

同時に突き刺さる、いくつもの視線。

その視線全てに、紛れも無い殺意が宿っていた。

「数は３０…と、もう１人。
人数から察するに、教会所属の騎士団か何かかな？
子供の吸血鬼一人を相手にするには、ちょっと過剰戦力ですよねぇ
…」

まあ最も、と溜息を一つ。

「私を相手取るのなら、幾らいたって変わりませんけどね」

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

テントの中に朝日が差し込む。

それと一緒に、私の目もうっすらと開いていく。

「ん…んぅ…ふぁ…」

思わず二度寝したくなるが、ここで寝るのはまずい。

パッと体を起こし、寝ている間に固まった体をほぐす。

体を伸ばすと、コキコキと鳴って気持ちがいい。

バラバラと散った髪の毛を櫛で整え、立ち上がる。

「ん、起きた。いい天気…」

テントの外に顔を出す。

「ああエヴァ。おはようございます。
ご飯もうすぐ出来ますからねー」

美鈴は、既に火を点けてご飯を作っているところだった。

「うん、おはよう美鈴…あれ？」

何だか、違和感。

これは…匂い？

「ねぇ美鈴…何か、匂いがする…」

「ご飯の匂いですかー？ちょっと味付け濃かったかな？」

「いや、そうじゃなくて…」

何て言うんだろう、これは…

「ええと料理で例えると、凄く美味しそうで、でも絶対に食べたくないような匂い…？」

それを聞いた瞬間美鈴の眉がピクリと動いたのを、私は見逃さなかった。

「ねえ美鈴、これが何の匂いか、知ってるの？」

「…ふふ、気にしない気にしない。ご飯出来ますよ？」

「ごまかさないで！

…この匂いを嗅いでるとね？自分の中の何か（・・）が、どうしようもなく疼くの…

それこそ、自分を押さえられない程に…！

ねえ、美鈴…！」

思わず美鈴の肩を掴む。

私の瞳に写る美鈴の顔は笑顔だった。

しかしその笑顔は、今は困ったように眉を寄せている。

「…あはは…」

頭を掻いて笑う美鈴。

「そうですよね。

いくら真祖でも、目覚めて２０年ならそろそろ発現していてもおかしくない…

私とした事が、うっかりしてましたね…」

「美鈴…何なの？この匂いは…この疼きは…」

自分が、少しずつ怖くなっていく。

疼きを自覚すると同時に、それが自分の中で際限無く膨らんでいこうとしている。

「…ふむ、」

美鈴が笑みを消し、私の顔を覗き込む。

ビクリとして後ずさるも、美鈴は私と目を合わせたまま。

「めー、りん…？」

「…ふふ、あと二週間って所ですかね？」

「な、何が…？」

笑顔に戻して呟く美鈴。

「ふふふ、内緒です♪
さ、食べましょうか？」

多分そうだろうなとは思ったけど、やっぱり答えてくれなかった。

何だか、酷く落ち着かない。

それでも美鈴は絶対に話してくれそうに無く（寧ろ私の反応を見て面白がっているようにも見える）、仕方無いのでご飯にありつく事にした。

…己の不安を、振り払うかのように。

もしここで無理矢理にでも美鈴から聞き出していたら、結果は違うことになっていたのかもしれない。

でも、後悔した時には何もかもが遅かったんだ。

（さて、吸血鬼ならば避けては通れない道。
元人間のエヴァは、一体どんな顔を見せますか？
そして、どんな行動をとってくれますか？
何より…どんな絶望を、味わいますか？
今から楽しみで楽しみで…くす、ああ待ち遠しい…！）

笑顔という顔の裏では、表面と同じ、でも表面と違う笑みを浮かべていた。

旅に出る。（後書き）

本格的にネギがいなくなる件について。

満月の下、狂気に吠える。（前書き）

・グロ注意
・厨二病万歳
・恐るべき低クオリティ
・美鈴…うわあああああ

この４つを見て、「ぉｋ把握ｗｗ」や「大丈夫だ、問題無い」等の方はそのままお進みください。

満月の下、狂気に吠える。

＜Ｓｉｄｅエヴァ＞

「ハァ…ッハァ…！」

身体が、熱い。

少し前から身体の中で燻っていたナニカが、外へ出ようと暴れている。

根拠は無いけど、それを絶対に外に出しちゃいけないって、直感的に思った。

何があっても、絶対に外に出すなって。

だからそれを、全力で抑える。

でもそれ（・・）は、私よりもよほど力が強かった。

目が霞む。

身体がふらつく。

「おっとっと…またですか、エヴァ？」

倒れそうになる身体を、美鈴が支えてくれた。

「全く、朝から何度も聞いてますけど、具合が悪いんでしょう？

そういうのは我慢せずに言ってくださいよ…」

「ううん、めー…りん。だい、丈夫…
何処も、悪くなんて無いから…」

本音を言うなら、もうすぐにでも倒れてしまいたい。

…でも、美鈴に、心配も迷惑もかけたくないから。

端から見たら馬鹿らしいと思うかもしれないけど、でも。

美鈴の前では出来る限り元気な姿を見せたいから。

だって「今の私」は、美鈴のお陰でここにいるんだもの。

だから、このくらい…

「平気だよ、めーりん。
私は、平気だから…ね？」

無理矢理笑顔を見せると、困ったように一つ溜息を零す美鈴。

「頑固ですねエヴァは…
わかりましたよ、折れてあげます。
でも、夜はちゃんと寝るんですよ？」

「うん。ありがとうめーりん…」

…隠せてる訳が無いのはわかってるけど。

でも、これは私の問題だもの。

「それじゃあ私は水を汲んで来ますので、この近くから離れないでくださいねー」

「うん、いってらっしゃい美鈴…」

水筒を持って近くの川へ向かう美鈴。

その姿が見えなくなった途端、急激に痛みが訪れる。

「っは……ぃあ…ぐっ…」

これで邪魔物はいなくなったぞとばかりに、私の中で暴れている。

「駄目…っあ、出て……来ないで…っふ！」

心臓を無造作に鷲掴みされたような、鋭い痛み。

危うく意識が飛びそうになる。

「か、は…っ！ごほっ、ごほっげほっ！」

思わず咳込む。

口の中から何かが飛び、手にベタリと張り付く。

「…ぅぁ……？」

目に飛び込んできたのは、己の手についた真っ赤な血。

それを見た瞬間、頭の中で何かが弾けた。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

頭が、どす黒いもので塗り潰されていく。

私の中で、何かが大きくなっていく。

「あ……」

ああ……何で気づかなかったんだろう。

欲しい物は、こんなに近くにあったんだ……！

「ヒハ、ア、アッハハハハハハハハ！」

面白くて仕方がない。

こんなにも気分が高揚したのは生まれて初めてだ。

「そうさ、何を我慢する必要がある…？
恐怖を振り撒き、怯えを糧に、欲望の赴くままに搾取し、深紅の血液の甘美な味に身を沈める……
それが私達、吸血鬼（バケモノ）じゃないのか……？
アハハ……そうだ、血だ…血はどこだ……！？」

三日月のように口は裂け、目はギラギラと血走り、全身に力が漲る。

血を吸いたい。

命を壊したい。

逃げ惑う矮小な存在を叩き潰し、その快楽を感じたい。

「そうさ…私は、吸血鬼っ！！
エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マグダウェルだっ！！」

さあ行こう…吸血鬼らしく、血を吸いに行こうじゃないか！

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

「起きましたかー。
やっぱり今日でしたねー」

空に浮かぶは、黄金の光を放つ満月。

妖が最も力を発揮できる、狂気の月。

「お嬢様達は……えーと確か、１５０年くらいでしたっけ？
それを考えると、目覚めるのがかなり早いですね……」

これは元が人間だから堪えられなかった、と見るべき？

それとも…

「エヴァが余程吸血鬼に向いていた？
いや、うーん……前者っぽいなぁ……」
それにしても…エヴァに飛行魔法を教えなかったのは成功だったたかな？

あれじゃぁ最寄りの町にすぐさま飛んで行っちゃいそうですし。

「ん～でも、放っておいても勝手に町についちゃうし、町で吸血始めちゃうと後々面倒な事になるし……
やっぱりここで止めちゃうのが一番いいですかね？
正気に戻ったらどうなるかはちょっと読めませんけど、まぁ死ぬ事はないでしょうし」

それじゃぁ…まぁ行きましょうか。

□□□□□□□□□□□□□□□

今エヴァンジェリンを苛んでいるのは、吸血衝動。

ある程度…それこそ千年以上生きているような吸血鬼でも、絶対に心の奥底にある衝動。

人間等と違い、それこそ数十、数百年の時を経てようやく抑えることが出来る程の狂気の衝動。
元が人間の、たかが３０年しか生きていないような小娘に、耐えられる筈も無い。

「まあだからこそ面白い……
久々に戦闘と呼べる程度の戦闘が出来ればいいんですが。
理性無くした子供を躾るのは簡単ですけど、それじゃあ意味無いし
……
…うーん、どうしたもんですかねぇ？」
普通に吸血鬼が暴走したなら、まあ街の一つ二つを犠牲にして止められれば僥倖って感じですが。
「ま、普通にぶん殴って終わり…いや待てよ？」
何と無く思い付いた方法を頭の中でシミュレートしてみる。
…口が裂けそうになるほど、笑いが込み上げてきた。
「…ふふ、面白そう……。
エヴァは一体どんな反応を示すかな？」

□□□

「…ん？」

不意に立ち止まる。

見知った雰囲気を感じ取ったのだ。

「あれ？エヴァ、どうしたんですかこんな所で？
具合の方は良いんですか？」

やってきたのは美鈴だった。

右手に水筒をぶら下げ、いつもの笑顔で立っていた。

「ああ、美鈴。おかげさまで気分が良いよ。
体の調子も悪くない…
ただ、少し喉が渇いているんだけど」

「そうですか！それはよかった…安心しましたよー。
水飲みます？冷たくて美味しいですよー」

と言いつつ、水筒の中身をラッパ飲みする美鈴。

酒でも入ってるのでは…と錯覚してしまう。

でも…私がほしいのはそんなものじゃあない。

…こんな距離、今の（・・）私なら一歩だ。

「私が欲しいのは…」

ドシュッ、

「…あ…？」

「血と、肉と、そして快楽だよ」

美鈴の腹を突き破った手が、グチュリと音をたてる。

美鈴の顔が苦悶に歪む。…今はその顔が、酷く綺麗に見える。

「が、はっ…！！」

「嗚呼、美味しそう…！」

そこにあるモノを掴んで思い切り引き抜くと、反動で美鈴の身体が倒れる。

私の右手に掴まれているのは、心臓。

まだ死んだことを理解出来ないのか、ドクドクと脈を打っている。

…嗚呼、嗚呼、辛抱出来ない。

「っ！」

無我夢中でかぶりつく。

…甘美。その一言に尽きた。

「あは……っ！」

口の中で血と肉が混じり合い、グチュグチュと音をたてる。

そして、理解する。

これが、私の求めていたモノだ……！

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

「…あ……？」

ふと、エヴァが声を漏らす。

森の間から見える空では、太陽が輝いていた。

「あ、れ……？私は…確か、テントの近くで……？」

一つ一つ思い出すように、昨晩の出来事を思い出そうとする。

しかし、どうしても記憶が抜け落ちたかのように曖昧であった。

「…何だ…？それに…この匂い……」

無意識に、手を己の目の前に持ってくるエヴァ。

「……え？あ、え……？」

真っ赤に汚れた自分の手。

いや、手だけではない。

自分の腕も、足も、服も、髪も、全部が真っ赤に染まっていた。
そしてその赤は地面にも写され。
「……あ？」
そして、エヴァはそれ（・・）を見つけた。
見つけてしまった。
そこにあるモノ（・・）を。
「めー……りん……？めい、りん、美鈴っっっ！」
胸には大穴。
左腕は無く。
右腕は転がり。
左足は千切れ。
内蔵を撒き散らし。
冷たく動かなくなった美鈴の姿が、そこにはあった。
「めいりん、美鈴！何でこんな…！」
そこで気づく、

辺りに充満する、濃い匂い。

そしてその出所と、それが何なのか。

「血の、匂い…？私の身体についてるのは、美鈴の血…？」

そして聡明な彼女は気づく。

それがどういうことであるかを。

「なん、で……？これって…私…！あ、あああぁぁぁぁ…っ！」

満月の下、狂気に吠える。（後書き）

予定だとこうはならないはずだったんだけどなぁ。

おかしいなあ。

とりあえず脱衣麻雀は怖い。

ああ怖い。

そしてプロットに致命的欠陥。

レミリアとフランに「エヴァ姉様」と呼ばせたいが為に始めたのに、

レミフラいるとこの先駄目だという。

ああ口惜しや。

己の闇と向き合う事で。（前書き）

・グロ注意
・オリキャラ視点

です。

ではどうぞー。

己の闇と向き合う事で。

私の名は……いや、名乗ることでも無いだろう。

私はとある国で、聖堂騎士団というものの支部館長を勤めている。

数多くの罪人を裁いたし、時には人間に危害を及ぼす化け物と相対し、それを辛くも打ち破ってきた。

その事が評価されたのかは知らないが、私は二十年で騎士団の中でもトップの方にまで上り詰めた。

しかし私ももういい年だ。

これ以上は、身体の方がついていかないだろう。

そう言って、司祭様と王に辞表を出した。

立場的にも私と幾らかの交流があった二人は、悲しそうにしながらもそれを受け入れてくださった。

この出撃が私の生涯最後の戦いとなるだろう。

部下達も私がやめる事は残念だったようだが、すぐに明るくなった。

まあ、副団長は……

「どうしたんすか団長〜。
顔が暗いっすよ〜？」

こういう軽い奴だからなぁ…。

「もう少し気を引き締めろ。
何せ今回の相手は…」

「もー、わかってますって。真祖の吸血鬼、でしょ？
でも聞いた所まだ年若いっていうじゃないっすか。
三百年ものの吸血鬼を打ち倒した事もあるじゃないすか！
だーい丈夫ですって！団長も俺達もいますし、負ける訳無いっすよ！
とっとと打ち倒して、パーッと騒ぎましょうや！」

全く、コイツは。

だが、この明るさに何度救われたかわからんな…

「…ふっ、そうだな。
帰ったら、私の奢りで飯でも食うか！」

「ヒュー、聞いたなてめぇら！
団長が奢ってくれるってよ！気張れよぉ！」

おー！と声を張り上げる部下の騎士達。

全く現金なものだ…。

「しかし、悪くは無いな。
さあ、行くぞ！」

□□□

2日をかけて、どうにか吸血鬼のいると思われる森の中を歩いていた。

教会の方の司祭様はこの森の中にいると占っていたし、司祭様の占いは外れたことが無い。

だからこの森の中を散策しているのだが…。

「いないっすねー…」

「簡単に見つかるとは思っていないさ。
少なくともあと3日はかかるだろうな…」

「何かもうこの森だけっつうのも飽きてきましたよー…」

溜息を零す副団長。

そりゃあ、私だってそんな簡単にみつかれば苦労はしないさ。

「索敵班、周囲の警戒を怠るなよ！
何か手掛かりがありそうならすぐに報告しろ！」

「「「了解です！」」」

□□□

今は最大限の警戒をしつつ、その気配の感知された所まで向かっているところである。

副団長も流石に軽口を叩くのをやめ、先を見据えている。

こういう所では本当に頼りになるな、こいつは。

「索敵班、場所はわかるか？」

「…微妙ですね。昼になってから、突然雰囲気がなくなった…」

「こちらの気配に気づいたのでしょうか？
何も感じない…」

…ふむ。

「逃げた、訳はないな。
真祖の吸血鬼が、我々を感知したくらいで逃げ出す訳も無い。
しかし虱潰しに探したが見つからなかった事を考えると、これ以上
闇雲に探し回るのも時間の無駄か…？
とりあえず、ここで一旦…ん？」

ゴウ、と一際強い風が吹く。

それに乗って流れてきた、強い匂い。

「あれ……？」

「この匂いは……！？」

他の団員も気づいたか。

ということは、少なくとも私の気のせいということは無さそうだ。

「…確実にこの風上で何かあったのだろう。

総員行くぞ。聖水は持ったか？」

「「「「はい！！！」」」」「「「「おう！」」」」

本当に、頼もしい奴らだ。

「各員警戒は怠るなよ！戦闘の準備をしておけ！行くぞっ！！」

風上から、風と共に流れてきた匂い。

何度も何度も嗅いだことのある、しかしいつまでも慣れることは無いだろう強い匂い。

強い強い、血の匂いだった。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

「血の匂いがどんどん濃くなっていきやがる…団長！」

「ああ、わかっている！全員速度を落とせ！」

号令にしたがって、走る速度を緩める。

血の匂いが、一気に濃くなった。

この先に…いるのだろう。

恐らくは、この匂いの原因となったモノも一緒に。

歩いていくと、鬱蒼と茂っていた木がいきなり途切れた。

どうやら、ちょっとした広場のようなものらしい。

……しかしそんな事を気にする余裕は、私には無かった。

その広場の一点、ただ一点に、私の視線は固定された。

いや私どころか、団員も、副団長までもが、視線を固定させて動けなかった。

惨状。

そう呼んで差し支えない状況だ。

座り込んで動かない金髪の小さい女の子。

その瞳もまた、目の前の一点を見つめて動かなかった。

そして、その一点。

紅、紅、紅。

紅という色を表すのなら、恐らくはこのような色だろう。

それは、人だった。いや、人であったものだ。
長く、綺麗な紅い髪が印象的な女性だった。
大柄ではあるがメリハリのある成人女性の体つき、辛うじて緑色だとわかる服に白いズボン。
しかし、その殆ど全ては紅に染まっていた。
ではその紅は何処から来たのか。
そんなもの、一目瞭然であった。
何かに貫かれたかのような胸の大穴。
大量の血が流れ出したのだろう、どす黒い固形物が張り付いている。
私は騎士ではあるが、少しばかりの医療の心得もある。しかしこの場においては、そんなもの無かった方がよかったと心底思った。
あの位置は、心臓……。しかしその女性の剥き出しの体内には、心臓が存在していなかった。
血の出方からして……その女性は、生きたまま（・・・・・）心臓をえぐり出されたのだろう。
その苦しみを私は知る事が出来ない。どれだけの苦痛だったのか…
それを想像することすら許されないだろう。
それ以外にも、足りない部分が幾つかあった。

辺りを見回して見ればそれがわかる。
四肢のうち、辛うじてくっついてるのは右足だけだ。
左腕は何処にも無いし、右腕と左足は無造作に転がっている。
そして、その切り口を見てわかった。この腕と足は、切られたんじゃない。千切られた（・・・・・）のだ。
一体誰が、どんな方法でこの虐殺を行ったのか。
しかしこんな惨状を見ても、私の頭はなぜかとても冷静だった。
「ぁ…あぁ……」
「……っ！誰っ！？」
隊員の誰かの漏らした声に反応して、少女が振り向いた。
何と言うか、普通に美少女だった。
しかし、私と隊員達が反応したのはその美しさではなかった。
その少女もまた、血だらけだった。
その体の隅から隅まで、余すところ無く真紅に染まっていた。
そして、見た所傷は何ひとつ見当たらない。

それはつまり……。

「お前達、手を出すなよ……」

「っ、団長！？」

「大丈夫だ、安心しろ……」

そう言って、ゆっくりと女の子に近づいていく。

怯えていた目は、私が近づくにつれて鋭くなっていった。

しかし、その目に憎しみは無い。

「…私は、ロードス騎士団のフランス騎士館長、フレデリク・アズナヴールだ。
陛下の名を受け、この辺りに潜伏しているという吸血鬼の討伐に来た」

自らの持つ剣を、少女の喉元に突き付ける。

「率直に聞く。お前が吸血鬼だな？」

「…何故？」

少女は、肯定も否定もしなかった。

「そこの死体から飛んだ血とその付着の仕方。
君の腕と顔を見れば嫌でもわからざるをえない。
他は…そうだな、君の今の反応くらいだな…」

「そう…」

一言呟いて、顔を女性の方へと向け直す。

「沈黙は肯定の証と受け取る。
このままでは私は君を連行しなければならないが？」

「……」

反応は無し、か。

「君を拘束させてもらう。すまないが、大人しくしていてくれ…」

縄を取り出す。

もしこれが罠でこの子が私に噛み付いてきても、私の首と肩の鎧には聖水をたっぷりと塗ってある。

この鎧と下に着ている服も特注品。

吸血鬼の力の攻撃でも最悪一度なら耐えられる。

…もし攻撃してきたら、その時は私がこの子を殺すのだろう。

だらりと垂れ下がっている腕を取って縄をかけようとする。

その時だった。

「……えっ？」

突然少女が立ち上がった。
それに驚き、少し下がってしまう。
少女は虚空を見つめて動かない。
かと思えば、いきなり手を突き出した。
「『魔法の射手・火の３７矢』」
「っ魔法か！？」
少女の手の平には火炎。
「団長、下がって！」
「わかっている！」
一息に部下の方へと戻り、武器を構える。
しかし、少女の作り出した火炎はこちらには飛ばなかった。
「何を…！？」
死体を、燃やしていた。
跡形も無くなるほどに。
念入りに、丁寧に。

血の痕跡を消すかの如く。
少女の打ち出す火炎が止まっても、火は轟々と燃え盛った。
火葬のつもりだろうか…。
肉が焼ける音がジュウジュウと鳴り、一部の団員の顔が青くなる。
しかし、私は何処か違和感を感じていた。
確かにこの熱気は凄まじい。
火葬をするには相応しいほどの熱量だろう。
……ならばなぜ、あの死体は灰や炭にならない？
いや、それどころか……まさか！！
炎が一箇所…死体に集束していく。
そして、それが一瞬にして爆ぜた。
ざわめく森の緑と、弾ける火の粉の赤を背景に。
ゆらりと、人影が立ち上がった。
「むぅ、ちょっと体がおかしいかな……？」
のんびりとした口調で独り言を漏らしつつ、身体を動かすその女性。

「めーりん……」

「あらエヴァ、おはようございます。
……て、もう昼ですか？」

「めーりんっ……めーりんっ！」

めーりんと呼ばれた女性に抱き着く少女。

「とととと……」

それを受け止め、血のついた髪を撫でる女性。

その姿は仲睦まじく、姉妹か母娘にも見えた。

「……団長」

「ああ…忘れられてるな、私達」

ひとしきり泣いて疲れたのか、少女は寝てしまった。

…ここで呆けてるわけにもいかんな。

「…話を聞いても、良いだろうか？」

「……ふふ」

小さく笑われる。

「今の私はただの妖怪ですよ？
少々歳をくっていますがね…」

「貴女は、確かに心臓を取られていた。
死者蘇生は神にこそ許された所業。
それをたやすく行うなど…
もう一度聞く。貴様は何物だ？」

「……はあ」

今度は溜息。

「うーん……ある程度の予想はついているんじゃ無いですか？
じゃあそれでいいじゃないですか。

……それとも、意義を申すか？人間よ？」

その言葉を聞いて、私の意識は途切れた。

□□□□□□□□□□□□□□

「う……」

「団長、起きましたか団長！」

重たい瞼を無理矢理上げると、副団長の顔が目に入る。

確か、私は吸血鬼を追って……それであの女性が……そうだ！

「副団長！あの女性と吸血鬼の娘は！？」

「俺達もあの後意識が無くて…ついさっき起きた所です。
観測班には一応気配を探らせました。
場所はわからないが、少なくともこの辺り…この国周辺にはいないようです。
俺達に出来ることは無いですし、一応任務は完了です。
戻りましょう……」

「…そう、か」

……。

「私の最後の任務がこれじゃあ、格好がつかんわな……」

「え？」

「祝杯をあげるという気分でも無い…
あと数年、団長やってみるかな？」

「マジっすか団長！ひゃっほーい！」

ああ、このままじゃ終われんさ。

私が騎士をやめるのは、もう一仕事終えてからだ。

…それにしてもまさかとは思うが、あの女性は……？

己の闇と向き合う事で。（後書き）

一応この団長と副団長の設定ありますけど、もう出ませんw

ロードス騎士団は実在の宗教騎士団。

実態はわかりませんので、割と独自設定。

ちょっと忙しくなるので、次の更新遅れます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8565o/

美鈴と吸血鬼のお話。

2011年2月22日13時43分発行